

## 清末・民国初期の中国

### —魯迅「故郷」の世界史教材化のための覚書—

群馬県立桐生高等学校 安達 淳

#### はじめに

魯迅（本名は周樹人）は、1921年5月、『新青年』に短篇「故郷」を発表した。主人公が故郷の人々の変容に人生の悲哀を味わうものの、なお未来への希望を信じるという物語である。作品はわが国では1972年以後すべての中学校国語教科書に収録されている。「国民教材」とも呼べるだろう。



魯迅(1881~1936)  
「タペストリー」\*p.232

世界史の授業で、中華民国の新文化運動を扱うとき、魯迅を逸することはできない。代表作として「狂人日記」や「阿Q正伝」とともに「故郷」と「藤野先生」を紹介するが、「故郷」は多くの生徒に深い印象を残しているようである。「中学校の国語で……」と作品について語ると授業がもりあがった経験が筆者には何度となくある。教室における反応から、「故郷」を補助教材として活用すれば、生徒の学習に資するように思われ、筆者は年来この小説を清末・民国初期の中国の授業の各回で話題とする方法を模索してきた。本稿はその試案の覚書である。拙い試みで恐縮するが、御批判御教示をいただき、改善できれば幸いである。

#### 1 教材としての提示

「故郷」を教材として最初に提示するのは、日清戦争の学習の終了直後としたい。「中学校で勉強した「故郷」を覚えていますか？ この小説をこれからしばらく中国史を学ぶ手がかりとしてみま

す。」と切り出すことができる。作品全文は文庫版で10数ページ程度である。ストーリーを生徒は承知しているはずであり、時間の制約もあるから、授業で全文を読み合わせるには及ばないが、少なくとも必要部分の抜粋は資料として用意したい。

「思うに希望とは、もともとあるものともいえぬし、ないものともいえない。それは地上の道のようなものである。もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。」（以下、引用は竹内好訳『阿Q正伝・狂人日記』岩波文庫に拠る）は「故郷」の終末の箇所である。最初の提示の際、これを読み聞かせ、「作者はなぜ希望について考えずにはいられなかったのか？ また、この時代の中国の人々の希望とは何だったのか？」と問いかけるとき、生徒が真摯に受けとめてくれるならばありがたいことである。

#### 2 語り手の「私」は魯迅か？

しかしながら、「故郷」を教材とする際、まずは作品の発表時期と作者の生涯を説明する必要がある。「タペストリー」p.232の魯迅の資料を参照すればよいが、以下の事項を補いたい。

1904年	仙台医学専門学校に入学。
1906年	医学専門学校を退学。東京に戻る。
1909年	帰国。郷里で教員となる。
1912年	中華民国政府(南京)の教育部に入り、政府の移動とともに北京へ転勤。
1919年	紹興の家を整理し、北京に移住。

日清戦争後、清は日本に留学生を出すようになり、日露戦争後、来日する清国留学生は年間5000～6000人に上った。彼らは帰国後、官吏や軍人となった。魯迅の人生はこの流れの中にあつた。生

\*『最新世界史図説 タペストリー 八訂版』

地、浙江省紹興の位置も説明したい。「タペストリー」p.217・232に紹興は示されていないので、地理用の地図帳を参照するのもよいだろう。

「故郷」の主人公は語り手の「私」である。「私」を作者本人としてよいのか。筆者は以下の部分から、主人公は魯迅であり、作者は読者がそのように解釈することを望んだと思う。

《それならね、お聞きなさいよ、<sup>ジュン</sup>迅ちゃん。あんた、金持ちになったんでしょ。》

「私」はかつて「豆腐屋小町」と評判だった楊おばさんに詰られる。経験上、楊おばさんは生徒に非常に人気の高い登場人物である。また、幼なじみの<sup>ルントー</sup>閩土と再会したとき、母が言った。彼の父親は「私」の家に繁忙期だけ来て働く雇い人であった。

《おまえたち、むかしは兄弟の仲じゃないか。むかしの<sup>ジュン</sup>ように、<sup>ジュン</sup>迅ちゃん、でいいんだよ》

「私」を魯迅と見なすことによって、作品は事実の記録ではないとしても、世界史の教材となる。

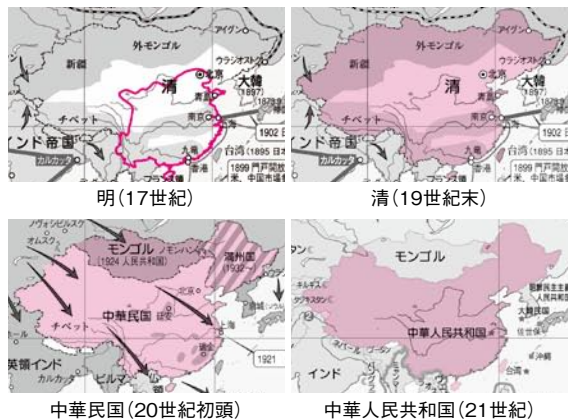
### 3 「故郷」の中の30年

「故郷」は1919年12月の帰郷時の体験から創作されたと考えられている。「私」は<sup>ルントー</sup>閩土に初めて会ったとき10歳そこそこだった。魯迅は1881年生まれだから、その時期は日清戦争直前の1890年頃であろう。1920年頃、「私」は変わり果てた<sup>ルントー</sup>閩土に再会する。「私」は昔「坊っちゃん」だった。魯迅の実生活でも、13歳のとき、役人だった祖父が投獄され、16歳のとき、病弱の父が死去した。

約30年を経て、主人公も故郷の人々も変わったが、小説ではその間世の中では何事も起こらず、ただ時間のみ経過したかのようである。しかし、現実の中国には激動が生じ、国際環境も激変していた。「タペストリー」p.38～39とp.40～41の世界全図を用いて、作品中の過去（19世紀末）と現在（20世紀初頭）との相違を確認できる。同時に、清と中華民国の領土がほぼ一致するという共通性にも生徒の注意を促し、三民主義に備えたい。

三民主義の解説には、「タペストリー」p.217の「孫文と三民主義」を利用できる。三民主義の「民

族の独立」を説明する際、「タペストリー」p.32～45も参照し、明、清、中華民国、中華人民共和国の領域を比較したい。比較を通して、今日の中国がほぼ清の領土を継承している事実に生徒は容易に気づくはずである。ここで「民族の独立」という構想が五族共和論とどのような関係にあるのかという疑問も生じるだろう。なお、この問題の考察には「タペストリー」p.98の②「清の対外政策」も有用である。領域の連続性に注目すると、三民主義の理解は深まり、また、現在の中国の民族問題を考えるヒントも得られよう。



### 4 離郷の旅

「私」が8歳になる甥の<sup>ホル</sup>宏児と会話を交わす。  
《汽車に乗ってゆくのか？》  
《汽車に乗ってゆくんだよ。》  
《お船は？》  
《はじめに、お船に乗って……》

小説の冒頭、帰郷する船の中に冷たい風が吹きこみ、末尾で「私」は船の底に水のぶつかる音を聞きつつ、過去・現在・未来に思いをめぐらす。江南地方の水運の発達と鉄道の中国社会への浸透が示される。この会話は「タペストリー」p.217のヒストリーシアターと併せて、鉄道が帝国主義時代に持った意味を考える際、参考になるだろう。

1919年に魯迅の一家は北京へ旅立った。当時の中国の鉄道の開通状況は、同ページの②「列強の中国侵略と日露戦争」で確認できる。この確認は辛亥革命の契機となった、清朝政府による幹線鉄

道国有化計画の説明に有用と思われる。

ところで、作品内部では一家が異郷に移り住む事情は明らかではない。「なぜ故郷を去るのか？ この旅は楽しい旅だったのか？ 悲しい旅だったのか？」

という発問に生徒はどのように答えるだろうか。楊お婆さんは「知事さまになっても金持ちじゃない？」と言う。「私」は失意のうちに離郷するとはいえないようである。1919年冬の帰郷時、留学帰りの魯迅は北京政府教育部の吏員であった。

ここで魯迅と蔡元培(1868～1940)との関係を考えたい。蔡元培は魯迅と同じ紹興の出身であり、浙江派の革命党、光復会の指導者であって、南京の臨時政府で教育総長となった。袁世凱独裁に反発して辞任するが、1917年から北京大学校長に就任し、胡適、陳独秀、李大釗等を大学に招き、新文化運動を推進した。1912年、魯迅を教育部に呼んだのは蔡元培である。魯迅は留学中に光復会に入会し、二人は革命派の同志でもあった。「タ

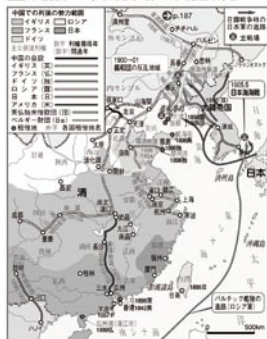
ペストリー」p.217の③「辛亥革命と軍閥の割拠」は上海における光復会結成を示す。

「私」はいわば辛亥革命の成功者として都へ旅立った。作品の中の旅にこのような時代の動きが見出されると思う。

## 5 動乱の影

日清戦争から辛亥革命に至る中国の変動と混乱は「故郷」の中で直接には語られない。しかし、最も弱い立場にいる閩土に動乱は影を落としてい

### ④ 列強の中国侵略と日露戦争一



「タペストリー」p.217

「私」と母親は閩土の境遇を思って「子だくさん、凶作、重い税金、兵隊、匪賊、役人、地主、みんなよってたかって彼をいじめて、デクノボーみたいな人間にしてしまったのだ。」とため息をつく。岩波文庫版の訳注では、兵隊と匪賊は立場は違うが同一物という。ここに戦争と革命の影が認められよう。エリートの「私」と貧しい閩土との間の距離はその後の中国の動乱をも予示する。「故郷」は階級問題を考えるためにも活用できよう。

る。顔は「黄ばんだ色に変わり、しかも深い皺がたたまれ」、手は「太い、節くれ立った、しかもひび割れた、松の幹のよう」である。彼はこぼす。

《作った物を売りに行けば、何度も税金を取られて、元は切れるし、そうかといって売らなければ、腐らせるばかりで……》

この税金は釐金とされる。釐金は、1853年、江蘇省で始められ、全国に拡大した通過税であり、1931年に廃止されるまで地方の財源だった。釐金は日清戦争の戦費および賠償金調達のため、イギリスとドイツからの借款の担保となった。

「私」と母親は閩土の境遇を思って「子だくさん、凶作、重い税金、兵隊、匪賊、役人、地主、みんなよってたかって彼をいじめて、デクノボーみたいな人間にしてしまったのだ。」とため息をつく。岩波文庫版の訳注では、兵隊と匪賊は立場は違うが同一物という。ここに戦争と革命の影が認められよう。エリートの「私」と貧しい閩土との間の距離はその後の中国の動乱をも予示する。「故郷」は階級問題を考えるためにも活用できよう。

### おわりに

「故郷」は中国においても1920年代以来中学校の国語教科書に収録され、多くの人々に読まれてきた。毛沢東は魯迅の愛読者で、1921年頃、湖南省長沙の学校で「故郷」を教材に国語を教えていたという。ともあれ、日本と中国で読み継がれているこの小説は日中両国民間の対話と交流のよりどころともなるのではないだろうか。

作品の終り近く、魯迅は若い世代を思う。「希望をいえば、かれらは新しい生活をもたなくてはならない。私たちの経験しなかった新しい生活を。」この一節には中国の近代史を学んでわかる重さがある。生徒が「故郷」を通して歴史を学び、世界を見る眼を養ってくれるならば本懐である。

### 《参考文献》

- 岡田英弘編『清朝とは何か』別冊『環』⑩、藤原書店、2009年
- 藤井省三『魯迅「故郷」の読書史』創文社、1997年

### ③ 辛亥革命と軍閥の割拠一



「タペストリー」p.217